
東方遺志継 ～あるいは、たったひとつの冴えたやり方～

Azuk

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方遺志継　　ゝあるいは、たったひとつの冴えたやり方ゝ

【Nコード】

N4077M

【作者名】

A z u k

【あらすじ】

色々な異変があった。色々な人達と、妖怪達と出会った。

時には腹の立つ奴もいたけれど、けれどこんなのは、博麗霊夢は全然、全く予想なんてしていなかったのだ――

”原作”が全て終わったあとのこと。

いつも通り五百歳児の吸血鬼が神社へ遊びに来たときから、物語は始まります。

※東方Projectの二次創作です。

書き始めたからには何年かかっても終わらせる気ではありますが、基本的に息抜きに書いているので更新は相当遅いかと思います。また、現時点（五話）ではありませんが、次話辺りで注意が必要な展開になるかと（タイトルで分かるかと思いますが……）。

これらのことに嫌悪感のある方、それから、設定や描写の捏造等が混じる可能性について忌避される方にはおすすめできませんのでご注意ください。

第一話 素敵な巫女と昼更かしの吸血鬼（前書き）

あらすじにも書きましたが、設定や描写の捏造、二次設定が混じる可能性について忌避される方にはおすすりできませんのでご注意ください。

第一話 素敵な巫女と昼更かしの吸血鬼

「霊夢ー、来たわよー。居ないのかしら、霊夢ー？」

初夏。ある日の午後のこと。

暑さも相俟ってか、普段の三割増しで閑古鳥が発生している博麗神社に、幼い少女――ただし巫女でないモノを指す――の声が響いていた。

「あら、いた。お邪魔してるわ、霊夢」

「邪魔するなら帰りなさいよ、妖怪」

「つれないのね、あの激しい夜をお忘れになってしまわれたのかしら？」

声の主は紅魔館の幼き月、レミリア・スカーレットである。

吸血鬼という人類種の大敵である彼女だが、何故か人間側の切り札の筈の博麗の巫女宅たる此処へとよく遊びに来る。

どれくらい『よく』かと言えば、彼女の来訪に気づいた時点で霊夢が迎撃も接客もせず二人分のお茶を沸かすようになっていくくらいには『よく』である。

付け加えるなら、レミリアの方もそれが当然とばかりに勝手に靴を脱いで上がり、一人万全の態勢でお茶と茶菓子を待ち構えるくらいには『よく』である。

お互いにこれでいいのだと本気で思っている節がある辺り、似たものの同士の二人ではあるようであった。

「……あの夜みたいに針だらけの血塗れにされたいのかしら？」

「怖いことを言うじゃないか。うちよりもよっぽど非道な悪魔の館らしいね、ここは」

「へえ。また退治されたいの、あんた？」

それはご免被りたいわね、などと嘯きながら、レミリアは卓袱台を挟んで霊夢の向かいに正座する。

二人が居るのは、博麗神社の母屋にある居間である。

畳張りで十畳ほど。卓袱台を置いたら布団が敷けない程度の、狭くは無いが広くもない空間。

だが「不思議と落ち着く場所だ」と、客人となる機会のあった者たちからは洋の東西、老若男女問わず口にする場所だ。

いそいそとお盆から二人分のお茶と茶菓子を卓袱台に置きながら、霊夢はレミリアを睨む。

一方レミリアは知らぬ顔でお茶を受け取り、『今日の煎餅はゴマか』などと茶菓子に心を向ける。

口でこそ物騒な応酬をしているが、その実平和なひと時であった。軽口すら楽しんでいる気配がある。

『あの夜』——言わずもがな、後に紅霧異変と呼ばれるようになった、紅い霧の夜のこと——まで持ち出している割には、随分と長閑なことである。

「何にせよ、パスウェイジョンニードルも夢想封印も食らい飽きたよ。っていうか、私が昼に弾幕ごっこなんてできるわけないじゃない」

「じゃあこんな真昼間からなんでウチに来るのよ……」

「暇だったから。もとい、霊夢に会いに来たといえはそれらしいかしら？」

「暇潰しに妖怪が神社に来るんじゃない！　ウチの評判が落ちるでしょうが！」

「落ちるほどあったのかしら？　それは驚きね」

「——ぐっ……人が気にしてることを……」

日傘を片手に、昼間神社に現れる吸血鬼。確かに理不尽な存在である。

そんなものがいては神社の沽券が、と言う霊夢だったが、直後にレミリアにさらりとやり返されて沈没した。

妖怪が来ようが来るまいが関係なく、昔から——それこそ霊夢が巫女になるより前からずっと——参拝客は来た試しがないのである。母数ゼロ。今更減りようがない。そんな冷たい方程式が霊夢の前には横たわっていた。

ちなみに、これを指して「火のないところに煙は立たないが、火も煙も、薪と酸素がなければ無力だぜ」とは普通の魔法使いこと霧雨魔理沙の弁である。

言いて妙だが、その後素敵な笑顔をした素敵な巫女の素敵な弾幕に打ち落とされたのは言うまでもない。

「つていうか、霊夢。私が言うのもなんだけど」

「何……？」

「この神社に来るの。魔理沙以外は全員人外じゃない？」

「………………。こふっ」

更に止めを刺されて、いっそ切ない吐息を漏らし、今度こそ霊夢は卓袱台に突っ伏す。

実のところ、レミリアの言う通りなのだ。

幻想郷に在って尚幻想となりかねない（参拝客的な意味で）博麗神社は、来訪する者もほとんど特定されてしまう。

具体的に言えば、霧雨魔理沙、伊吹萃香、八雲紫、そしてレミリア・スカーレット。

恒常的に博麗神社に来る者といえば専らこの四人のみだった。最近はどこぞの不良天人も顔を見せるが。

このうち真っ当な（魔法使いが「真っ当」というのも変な話だが）人間は魔理沙一人。

ちなみに天人もどちらかといえば仙人等に近い、「人を外れたもの」であり、人間には含められない。

そして残りのメンツはと言えば、「妖怪の山の四天王」に「妖怪の賢者」、「紅い悪魔」。

もう清々しいまでに大妖怪であつた。

人より妖怪に気に入られる妖怪退治屋というのはどうなのだろうか。

「いっそ、逆に人間退治屋とかやった方が信仰集まるのかしら……？」
おさいせん

「微妙ね」

紫辺りが聞けば凄絶な笑みを浮かべてスキマツアー送りにしていただろう霊夢の台詞は、やっぱりレミリアによってばっさり切り落とされる。

二人の雑談はいつもこんな感じだった。

「でさ、紫が『これは少女臭よ』って——あれ？」

「あら、どうしたの、霊夢？」

そのまま他愛のない話が続き、やがて高かった日も落ちかけた頃。ふと霊夢が首を傾げる。

「誰か来た——って、考えるまでもないか。そこにいるんでしょ、咲夜」

「……気づかれましたか。失礼してるわ、博麗霊夢。それで、お嬢様、そろそろお時間が」

「ん……もうこんな時間か」

声と共に、レミリアの後方へ、音もなく従者が現れる。言わずと知れた完璧で瀟洒な従者――十六夜咲夜である。

普段は文字通り常に側仕えしている咲夜だが、レミリアが神社で談笑しているときに限っては側に居ないことが多い。

そして夕方頃、そろそろ帰らねばという時間になるとどこからともなく現れ、主人に刻限を知らせるのだ。

別に主人一人放り出して家にいるわけではない。レミリアについて境内まで来はするのだが、母屋までは入らずに外で待っているのである。

外敵に備えるためか、多くの従者に囲まれて暮らす主人の息抜きのためかは不明である。案外、自分が息抜きしているのかもしれないが。

或いは、外で談話しているときは普通に側に控えているので、建物の中に入りたくないだけという可能性もある。

ともあれ、いつも通りに咲夜はレミリアを迎えに来たらしかった。

「『もう』ってほどすぐでもなかったでしょうに。あんたお茶何杯飲んだか分かってんの？」

「さて。数えたことがないな。私は紅茶党だから」

「今ここで飲んだ緑茶の量を聞いてんのよっ」

「何のことかしらね……あら、そろそろ帰らないと美鈴が心配するわ」

うがー、と唸る霊夢から逃げるように、レミリアがそそくさと立ち上がる。

このままだと封魔陣の一発でも食らいかねないとレミリアが慌てて帰る準備を始め、一方で瀟洒な従者は如才ない動きを見せた。

「……ナニコレ？」

霊夢に差し出される包み。

何やら形状からして缶のようである。

「よい茶葉が手に入ったので、普段からのお嬢様とのお付き合いのしるしにと」

賄賂——もとい、心づけ。或いは巫女だから供物か。

いや、供物は神に捧げられるもので別だろう、などとレミリアは他愛もないことを考える。

己の従者の完璧ぶりに舌を巻きつつ、こっそりと土間へ下りて靴を履きながら。

「ほほう。ただ、レミリアがガバガバ飲んだのは」

「外の世界から、八女の玉露よ。私も飲んだけど中々の出来だったわ。

ああ、うちで八女茶の茶葉を使った西洋焼き菓子を作るから、今度それも持ってくるわよ」

「やーいいの？　ありがとね咲夜！　私もレミリアとは末永く付き合っていきたいと思ってたところよ！」

鮮やかな変わり身。

軽いなおい、などというツツコミをしに戻ると野暮天だと分かっているクールな吸血鬼は、従者を一瞥する。

愛コンタクト、じゃなかったアイコンタクトだ。

微かに肯きあうと、レミリアは霊夢が心変わりしないうちに玄関の戸を勢いよく開け、駆け出していった。

霊夢と咲夜はそれを生暖かい視線で見送ると、

「それじゃ霊夢！　また来るわ！」

「はいはい、気をつけて帰りなさいよ」

「……迷惑かけるわね、いつも」

「おばあさんそれは言わない約束で——痛っ!？」

「誰がおばあさんよ」

「ツツコミにナイフ使うんじゃない!」

喧嘩を始めた。

追いつくのが遅い、と全力疾走で帰宅していた吸血鬼が人間の従者を叱るのは、これから四半刻ほど後のことである。

第一話 素敵な巫女と昼更かしの吸血鬼（後書き）

第一話を読んでくださった方々、ありがとうございました。感想、ご指摘等ありましたらよろしく願います。

第二話 楽園の巫女と忘れ傘（前書き）

霊夢がご飯を食べるだけの話。

第二話 楽園の巫女と忘れ傘

「ふう……いい汗かいたわ」

その日、レミリアたちが帰った後のこと。霊夢はさっぱりした顔で火を熾していた。

弾幕ごっこはいつも通り霊夢の勝ちだったようである。異変時の霊夢が異様なほどの強さを誇るのとは割と知られているが、普段から霊夢は強い。勝てる相手がほとんどいないくらいに。

そんなわけの場合によっては妖怪から化け物扱いされるこの楽園の巫女だが、現在霊夢は楽しそうに竈へ薪をくべていた。こうしていとまるで普通の人間のように見えるから不思議だ。やろうとすれば『思う通りにずっと燃えるお札』なども作れるのだろうが、霊夢は自身の超常的な力を普段の生活に活用する気はない。

「はじめちよろちよろ中ぱっぱ、赤子が泣いても蓋取るな……ってね」

竈の上には羽釜と鍋が一つずつ。羽釜の中には水に浸しておいたお米が入っている。言わずもがな夕ご飯である。

霊夢の食生活は、江戸時代で文化がほとんど停止している幻想郷としては裕福だ。

霊夢の普段の夕食の内訳は、米と味噌汁、煮物と焼き魚に小鉢一つ、ついでに香の物。典型的な一汁三菜である。

里では一汁一菜が多いため、大抵の人間よりは健康的な食事だ。これには「幻想郷の抑止力として倒れられては困る」という割とのっぴきならない事情もあるが、妖怪退治や異変解決でお金にはそう困らないからという理由が大きい。

ただし、その分お賽銭は集まらない。異変解決で生計を立ててい

る分お賽銭までもらえないのか、お賽銭がもらえないから異変解決で生計を立てざるを得ないのかは微妙なところだ。

閑話休題。

まあともかく、そんなわけで霊夢は今日もせつせとご飯を作っている。

今日のメニューは白いご飯に高野豆腐の味噌汁、鮎の干物にかぼちゃの煮つけ、ほうれん草のおひたし、そしてたくあんだ。

羽釜の様子を見ながらかぼちゃを煮る。旬というにはまだ少しばかり早い、三日ほど前に人里で買ったそれは身がしっかりしていて、煮ても溶けてしまったりはしなさそうだった。

しばらく弱火を保った後、頃合を見て米を炊く火を強める。同時に煮物の鍋を下ろし、煮崩れを防ぎつつ味を染みさせた。煮物は温度が下がるときに味が染みる、と霊夢は経験から知っている。

中火を保ってしばらく。そろそろ羽釜が吹き零れるか、という辺りで今度は火を維持する手を止めた。鍋を竈の上に戻し、たくあんを出してくると、ざっと洗ってから切り始める。一月ほど前に霊夢が自分で漬けたものである。

たくあんは晩酌のお供用に少し多めに切っておく。そしてちよいと一口、つまみ食い。いい漬かり具合だ、というように一つ頷くと、今度は七輪を出して、竈の火を移した。

「んー……そろそろかな」

七輪の火が安定すると鮎を乗せ、弱火で続いていたかまどの火を消して蒸らしに入る。それと同時に高野豆腐の味噌汁——ちなみに朝ご飯の残りだ——をかぼちゃの煮つけの入った鍋と入れ替え、竈の余熱で温め始めた。

魚が焼けた頃にはいい塩梅になっているだろうという目算だ。手

馴れたものである。

竈に使っていた火吹き竹を片付け、ぱたぱたと扇いで七輪に空気を送る。「鳥皮魚身、とりかわうおみ♪」と節をつけながら呟く霊夢は魚の焼ける匂いにご満悦の様子だ。

鮎は今朝方に人里でもらった一夜干し。長くは持たないから今日のうちに食べてしまった方がいい。

頃合を見て魚を返し、やがて皮目にまでしっかり焼き色がつけると皿に移す。七輪と竈の薪を火消し壺に入れて、いよいよ羽釜の蓋をあけた。

わあ、と白い湯気が飛び出して視界を白く染め、炊けたご飯の芳醇な香りが広がっていく。高く上がった香りは魚の焼けた匂いに混ざって何とも言えず霊夢の食欲をそそった。白い視界の奥、微かに見えるお米はぴんと立っていて、今日も改心の炊き上がりである。

「よし、完璧ね」

ご飯は熱いうちにかき混ぜてざっと水分を飛ばし、おひつへと。

女一人暮らしではあるが、よく運動（弾幕ごっこ）をする霊夢は割と健啖家であり、一食でご飯の二、三杯分程度は必ず食べる。

……もちろん、西行寺幽々子などと比較すると食べていないに等しいのだが。アレは規格外なので気にしてはいけない。

一旦おひつだけを持って居間へ。卓袱台を片しておひつを置くと、土間に戻って今度はおかずその他諸々盛り付け、箱膳を運ぶ。

さあ食べるかと勢い込んで居間へと上がろうとし——霊夢は視界の隅、土間の端辺りにふと違和感を覚えた。具体的に言うところ、居間の入り口付近に普段見ない色がちらついている気がする。

一度気づいてしまえば気になって仕方ないと、霊夢はとりあえず箱膳を居間の入り口に置いて土間へと戻ることにした。

果たしてそこにあったのは、

「……傘？」

何の変哲もない、一本の傘であった。薄い桃色を基調とした西洋傘で、派手派手しくならない程度にフリルがついている。作った者と選んだ者のセンスが伺える一品であった。

何の文句のつけようもないただの傘である——ただ一点を除いては。

「つて、これレミリアの日傘じゃない」

そう、どう見ても紅い悪魔の所持品だったのだ。どうにも夕方帰ったときに忘れていったらしい。

いつも見慣れた形状だし、何より微かにレミリアの妖気が纏わりついている。一般人が持てば謎の体調不良に陥るだろう。

日光に弱い吸血鬼が日傘を忘れて変えるとは何事か——霊夢は呆れのため息を吐いた。いくら夕暮れとは言え無茶をする。あのバカ気化してないでしょうね、とひとりごちた。

さて、しかしどうしたものだろう。届けるべきだろうか、と博麗霊夢は考える。明日か一週間後か一ヵ月後かは分からないが、とりあえずこのまま置いておけばレミリアはそのうち取りに来るに違いない。

だがそのときにはきつと夜に来る。当たり前だ、日傘はここにあるのだから。そして夜遅いから泊まっていくわという流れになり、十中八九その他を巻き込んで夜通し宴会になる。最近お酒のストックが少ないからそれは避けたい。

ついでにいえば、これからもよろしくと今日言われてお茶をもらったわけで、直後に日傘を届ければ何かまたもらえるかもしれない。もとい、よろしくしあった間柄で忘れ物一つ届けないというのはどうにも体裁が悪いだろう。

「……でも」

ごはん。

音として出さずに呟いたその言葉は、代わりに吐息となり、白いご飯から出る湯気を揺らして自己主張した。

常備菜のお浸しやたくあんはそのまま晩酌に使いまわせる。が、鮎の一夜干しの具合は今の時こそが極上だろう。炊き立ての白いご飯も至高の味わいを約束している。かぼちゃの煮付けは冷めても美味そうではあるものの、今はあのほこした食感を楽しみたい。それに何より、先ほど温めなおした味噌汁は食べてしまわないと悪くなるだろう。余熱で温めたのは煮立たせないためなのだから。

しかしこの熱々の夕ご飯を食べ終われば、今よりもっと汗をかく遊びで行う弾幕ごっこ。「少し汗かいて気持ちいい」などというレベルでなく、普通に汗くさくなるレベルで。ただでさえ弾幕ごっこの後に火を使って、少し汗ばんでいるというのに。

そうなれば風呂に入らなければなるまい。ご飯を食べて風呂に入れば、もう深夜だ。今日は昼に博麗神社に来たのだから、咲夜もレミリアも寝ているだろう。二人が寝ているならお礼は期待できない——もとい、寝ていることが分かりきっている時間に訪ねるなんて非常識だ。

「このままでいいのか、いけないのか、それが問題ね」

まるで父の幽霊に叔父の殺害を教唆された王子のような顔で霊夢は考える。

本人にとっては非常に重大で哲学的なこの問いは、結局30秒ほどで「明日の昼ごろ行けば咲夜が起きてるでしょ」という結論を見た。

第二話 楽園の巫女と忘れ傘（後書き）

一話当たりの適正な量がよく分かりません……

本当なら傘届けに紅魔館に行って——というところまでで二話にする予定だったのですが、長くなりそうだったので書いたところまでを。

どう考えてもご飯にこだわりました。

第三話 幻想の巫女と門番妖怪（前書き）

独自解釈がかなり混入注意です。

第三話 幻想の巫女と門番妖怪

日が回って、翌日午後。

霊夢はレミリアの傘を持って、紅魔館への道を飛んでいた。

天候は快晴。雲間から射す日はじりじりと霊夢の黒髪を焼くようで、少し鬱陶しさを感じるほどだ。

「もう夏ねえ」

はあ、とため息を吐く。

夏が嫌いなわけではないが、暑いのが特別好きというわけでもない。むしろじつとりとした幻想郷の夏の暑さは苦手な部類に入る。

そしてもちろん寒いのも嫌いだ。夏は暑いと文句をいい、冬は寒いと不平を垂れる。

それが人間として自然な在り方なのだと、霊夢は思っている。

博麗神社から紅魔館までは、そこそこ遠い。

最短で行っても、人里を通り越し、魔法の森を横目に見ながら霧の湖まで飛ぶことになる。幻想郷の半分ぐらいは横断する計算だった。更に言うと、盆地である幻想郷の中心付近にあり、更に平野になっている人里は、特に暑い。

何にも遮られることのない日光が燦々と降り注ぐからである。

霊夢が下を見てみれば、人里は今日も平時の活動中だった。田畑を耕し、物を売り歩き、子ども達が駆け回る。

夏だと言うのに逞しい連中だ、と少し呆れながら、霊夢は速度を上げた。

人里さえ過ぎてしまえば、刺すような日差しも幾分和らいでいく。妖怪の山の標高が幾らか日を防ぎ、西に見える魔法の森の瘴気が日

光を妨げているからだ。

この辺りまで来ると、霊夢もほっと一息をつけるようになる。

このまま霧の湖に差し掛かれれば、年中掛かる霧が涼しくらいの体感気温を齎してくれる……はずだった。

「全く。何で私がこんなことを——ん？」

そのまま飛び続けること半刻ほど。

ようやく霧の湖に差し掛かろうかという辺りで、霊夢は異変に気付く。

霧の湖に、霧がない。

霧の湖は一級の霊地だ。故に霊気を含んだ霧が、必ず湖の上を揺蕩っている筈なのである。

例外と言えば、湖付近の妖精たちが軒並み薙ぎ払われて一時的に格が落ちたか、或いは——

「もっと強い妖気や魔力に吹き飛ばされたか、よね。これは……レミリア？」

霧の代わりに残留しているのは、レミリア・スカーレットの妖気だ。紅魔館へ近づくにつれて強く感じる辺り、紅魔館内部で派手に暴れた余波だろう、と霊夢は当たりをつける。

面倒ごととは勘弁してよね、と愚痴りながら紅魔館の前に降りた。

此処まで来ると相手も分かる。

レミリアの撒き散らした妖気に混じった、微かなフランドールの妖気の匂い。

どうやら姉妹喧嘩の産物らしい。昼間から元気なことだ、と霊夢はため息を吐いた。

「あら、博麗の巫女。そっちから来るのは珍しいわね」

「そっちこそ、今日は真面目に門番してるのね、美鈴」

「やだなあ普段は真面目にやってないみたいじゃないですかー。あはは……」

珍しく門から素直に入ろうとした霊夢に声を掛けたのは、紅魔館の門番、紅美鈴である。

霊夢の体感では結構な確率で寝ている奴なのだが、今日は起きていたらしい。

正直にそれを指摘すると目を逸らして唐突に敬語になった辺り、やはり今日はたまたまなのだろうが。

冷や汗をかく美鈴をジト眼で見遣りながら、霊夢は用件を告げる。

「ま、いいわ。今日は客よ」

「それは結構なことです。どのようなご用件で？」

「これよ、レミリアの傘。ウチに忘れてったから届けにきたわ。全く、吸血鬼が日傘忘れてくんじゃないわよ」

「わあっ、わざわざありがとうございます！　上がっていかれますか？」

「どうしようかしらね…暑いから日が柔らかくなるまで休みたいけど」

「では上がってってください、お嬢様も喜びます」

「んん？　レミリア起きてんの？　いや、この妖気見れば何となく分かるけどさ。でも今お昼じゃない」

美鈴の態度の分け方は簡単だ。客には敬語、侵入者には威圧。

今回は客だと判断されたらしく、霊夢は丁寧に対応された。初対面では巫女は食べていい人類などと宣っていた相手が敬語を使ってくるのが、霊夢には微妙にむず痒い。

とはいえまあ、今回に限っては好都合と言うべきか。丁寧に扱われるならばある程度突っ込んでも応えてくれるだろうと踏み、霊夢は

先ほど気になったことへ切り込んでみることにした。

問答無用で突破する普段ならいざ知らず、客に対して腹芸が出来るほど美鈴は器用には見えない。

「ああ……お嬢様と妹様が、ちよつと。拳で語り合うという奴ですかねー」

「主とその妹が喧嘩してんのに随分悠長ね、あんた」

「まあ、私が関われる問題じゃないですからねえ」

にやははー、と言わんばかりの美鈴に、こりゃダメだわと霊夢は嘆息する。

レミリアも起きているらしいし、直接聞いた方が早そうだと勘が言っていた。

仕事をしたくなくて釘を刺そうとしているのに、それが一仕事になるとはこれ如何に、と霊夢は心中で呟く。

霊夢にとっては、自分が面倒ごとに巻き込まなければそれでいいのだが。

面倒ごとに巻き込まれたくないから面倒ごとに首を突っ込む、という矛盾については、今は考えないことにした。

「ま、いいわ。じゃあレミリアに直接聞くことにする」

「そうしてください、今伺いを立てますから。あなたが来たと言えばお嬢様も喜びます」

「喜ぶ……ねえ」

その気持ちが霊夢には分からない。

霊夢は人間で、博麗の巫女だ。餌で、天敵。それが堂々と客人を名乗って、何故喜ぶというのだろうか、あの吸血鬼は。

そもそも、悪魔と称される大妖怪が神社へ年がら年中遊びに来るのが異常なのだ。

そう言うと、美鈴は少し困った顔で門番の待機所の向こう、紅魔館の本館を見た。

「それは……霊夢さんだからですよ」

「私だから？ ……なに、私にソツチのケはないわよ」

そういう意味ではなく、と前置いて、美鈴は語り始める。

「霊夢さんは、妖怪の理想なんです」

「はあ？」

「霊夢さん。妖怪って、寂しがり屋なんですよ、本当は」

「…なにそれ」

「妖怪と言えど、寿命が長くて、その分付き合いもあっさりしてて。仲がいい相手が死んでも、一日悲しんだらあとはすっぱり忘れる。

そんな風に思ってますか？」

少し寂しそうな目をして問いかける美鈴に、霊夢は諾と応えた。

実際、今まで会った妖怪達は、みなそのような印象を抱かせる連中だったからだ。

「そう、それは間違っています。

……でも、それは最初からそうだったと思いますか？」

「……最初？」

「生まれてすぐから、です。

人間の大人に近いかそれ以上の知性を持って発生した妖怪達は、最初から達観していたかと言えば、そうでもないんです。

知性があるから。死という意味を分かっってしまうから、私達妖怪は酷く臆病なんですよ。傷つくことに。失うことに」

「ああ……なるほど。だから、あんた達は」

「そうです。もう慣れたと。死なんて見慣れてきたと、そう強がる

んですよ。

心に傷を持ちながら、覆って、隠して。でもそれは、やっぱり長い間残っているんです」

だとすれば。

妖怪が、霊夢を憧れるというのは。

「霊夢さんは、きっと最初から最後まで霊夢さんです。誰に何があっても、あなたはあなたのままでしょう。

生まれながらに『空を飛ぶ』——何にも縛られない霊夢さんは、妖怪の演じる姿、在りたかった姿なんですよ」

「……………随分と、買いかぶってくれるわね。だけど」

妖怪に妙に懐かれる理由は、それか。

そう呟いた霊夢に、美鈴は少し哀しそうに笑って、肯いた。

「お嬢様も同じです。あの方の500年も、別れに彩られたものでしたから」

「なるほど、ね」

もしかしたら、女性の妖怪の多くが少女の姿形を取るのも、そういう理由かもしれないかと、霊夢はぼんやりと考える。

心と知性のバランスがどうしても知性に偏ってしまうから、100年、1000年を生きる彼女らは未だ少女の精神のままなのではないか、と。

思いがけず、思いもよらなかったことの回答が得られた霊夢は、少し頭の整理に時間が必要だった。

だからだろう、その気配に気付かなかったのは。

「主がいない間に、随分と面白い話をしているのね、美鈴」

「お、お嬢様っ!？」

いつの間にか紅魔館の主、レミリア・スカーレットが紅美鈴の後ろに立っていた。

第三話 幻想の巫女と門番妖怪（後書き）

そして話は進まない。来年中に完結できれば御の字だろうか。

※5月5日、気になったところを少し修正。

余談ですが、男の妖怪は大人（青年程度ゝ年寄り）が多いんじゃないかと勝手に思っています。男は見栄っ張りですから。

「女の子は年齢じゃない生き様だ」なのであり、「意地があんだよ男の子には」なのです。

第四話 紅白の巫女と紅色の妖怪主従（前書き）

相変わらず独自設定注意です。あと今回いろいろ荒いかもしれませ
ん。

第四話 紅白の巫女と紅色の妖怪主従

唐突に出現したレミリアは、普段のものと比較すると少し質素に見えないこともない、それでもやはり真っ赤な日傘を持って美鈴の背後に佇んでいた。

霊夢からは美鈴越しに翼だけが顔を覗かせているレミリアだが、その体に纏うオーラからしてその不機嫌さを物語っている。

美鈴もそれを背中に感じているのか、あわわわわと呟きながら、可哀想なくらい顔を青くしていた。

「美鈴」

「はいっ！」

レミリアが声をかける。と同時に、美鈴がバネのような動きで直立不動の姿勢に移行した。

わあこわい、と霊夢は他人事のように呟く。

思いも寄らないことの連続で、己の思考が未だ少し麻痺していることを霊夢は自覚していた。

「ねえ美鈴、いつから門番の仕事には主人の内心を想像して客に語ってやるのが含まれるようになったのかしら？」

「いやそのこれはですねお嬢様」

「美鈴」

「はいっ！」

美鈴の回りをゆっくり歩きながら喋るレミリアに、美鈴はおろおろしながら弁解しようとしていた。

しかし、名前を呼ばれると跳ね返るように返事をして直立不動に戻るし、

その上緊張からか出てくるのは「いやあのこれはですねその」などの言葉ばかりで、中身のある発言が全く出来ていないようだった。これはまともな弁解にはなりそうにないな、と霊夢は見ていた。

そもそも考えてみれば、一介の従者が「うちの主人は寂しがり屋ですから構ってあげて下さい」なんて発言をするのは確かに色々とまずい。

普通の主従に関する礼式とか作法とかの知識が殆ど無い霊夢にもそれぐらいのことは分かる。

ただ少し、レミリアが身内に向かってそういう事を咎めることは意外なことと感じられた。

その意外さは或いは、紅魔館の各員の、謎に包まれた関係に端を発しているのかもしれない。

「ねえ、美鈴」

「はいっ！」

「お前は——妖怪にしては少し、人間を特別にし過ぎるわ」

「……それは、どういう意味でしょうか？」

「里の人間が勝負に来たら相手の力と技量に合わせて手加減してあげたり、勝っても負けても必ず送り返してあげたり。それに魔理沙や霊夢を、あなたはよく眩しそうな顔をして見ている」

「それは——」

「美鈴。お前は——人間に、未練があるの？」

美鈴の前に立ち、美鈴の目を真っ直ぐに見据えて、レミリアは問う。その瞳には少し、不安の色が混じっていた。

「……私は。紅美鈴は、その名を背負って生まれた時から妖怪ですよ」

「……そう。済まなかった。私の失言だな」

「いえ、私の至らなさが原因です。申し訳ありません」

微笑を浮かべて応える美鈴に、レミリアは痛ましいとでも言うような顔をして謝罪する。

それにもやはり美鈴は笑みを以て答え、そして霊夢は完全に蚊帳の外であった。

なんか二人で世界作ってるし帰ったほうがいいかなあと思っていたりする。

そんな霊夢の様子に気づいたのは、レミリアが先だった。

「さて……ごめんなさい霊夢、見苦しいところを見せてしまったわね」

まるでそこで語りかけるのが既定事項だったかのような顔をして、レミリアは霊夢に声を掛けた。

その後ろでは突如現れた咲夜が美鈴を、耳たぶ掴んで館内に連行していている。

レミリアに向き直って、構わないわよ、と霊夢は手をひらひらと振った。

「傘を返しに来てくれたのだったな」と言うレミリアに、「それと事情聴取ね」と霊夢は付け足す。

今ならレミリアもある程度素直に答えてくれるだろうという目算があった。

紅魔館の連中が、レミリアも含めて、今のような身内向けの顔を見せるのはひどく珍しいことだ。

紅霧異変の時にはパチュリーですらレミリアを「お嬢様」と呼んでいたほどである。

それほど明確に身内だけの時と部外者がいる場合の言動を分けている集団なのだ。本来は。

「事情聴取？」

「霧の湖の霧が吹っ飛んでた件よ。喧嘩すんなどは言えないけど、あれは何？」

「ああ、あれか……」

眉根を寄せて答えるレミリア。

その顔に、また面倒事の匂いがするなあ、と霊夢は心中で嘆息した。

「フランがね……外になんて出たくない、って言うのよ。私とパチエと、咲夜と美鈴が居れば、それでいいんだって」

「あら。いいことじゃない。出したくないんでしょう、外に？」

「怒るわよ、分かってるくせに」

「……ああ、そういう。そうね、私にもあったわ。修行が嫌で嫌で、拗ねて「ご飯なんていらない！」って言って先代巫女おばあちゃん困らせたことが」

「おや、霊夢にもそんなことがあったのか。……でも、そうね、だいたいそういうことよ」

生まれてすぐ幽閉されて数百年経って、外に出たくないわけがないのだ。

愛する妹を不本意に数百年も幽閉して、外に出してやりたくないわけがないのだ。

それでも出してやることは出来ない。

少なくとも、今のフランドールが外に出るとなれば、レミリア達も、紫も、そして霊夢自身も止めざるを得ない。

「で、なんとか出られるようにしたいわけだ。お姉ちゃんとしては」

「茶化すな。取って食うぞ」

「わあこわい」

どちらともなく苦笑する。

霊夢が持ってきた傘を差し出すと、うむ、と頷いてレミリアが受け取った。

何に頷いたのか、敢えて聞くことはしなかった。そんなものは聞くまでもなかったからだ。

だからその代わりに、お節介な言葉を掛けた。

「私の出番がありそうなら、先に言いなさいよね。いきなり異変起こされても面倒だし」

「ふむ？」

レミリアは少し意外そうな顔をして、ならこれを渡しておこう、とポケットから手紙を差し出した。

なにその「自分から働こうとするなんて珍しいな」って顔は、と視線で語って、それから霊夢はその手紙を受け取る。

今は開けないでくれ、とレミリアは言った。

じゃあいつ開けるのよ、と霊夢が訊くと、何故か自信満々に、開けるべき時は自ずと分かる！とレミリアは胸を張っていた。

きつと何かの本通りに影響されたに違いなかった。

ほどほどにね、私に面倒が掛からない程度に頑張んなさい、とだけ言って、霊夢は後ろを向いた。

背中から、「前向きに検討するわ」という声が聞こえて、霊夢は口角を上げる。

そのまま飛び立った霊夢は一度も振り向かず、一路博麗神社へと帰っていった。

だから気づかなかったのだ。

レミリアが悲しそうなような申し訳ないような、そんな顔をして霊夢の背中を見つめていたことに。

第四話 紅白の巫女と紅色の妖怪主従（後書き）

※この作品、というか私の中では美鈴は元人間（武術家）です。短編一本分くらいのドラマがあつて妖怪になり、お嬢様に拾われました。

その話はいつか書くかもしれません。

ただ、PCとか持ち込めないところに住み込み就職になりました。これの次すらいつになることか分かりません……。申し訳ありません。

第五話 忘れられた神の神子と過去からの手紙（前書き）

そろそろサブタイトルのネタが切れてきました。

第五話 忘れられた神の神子と過去からの手紙

紅魔館を訪れてから、今日で四日目。

霊夢は居間の畳にごろんと仰向けに寝転がり、件の手紙を見つめて悩んでいた。

手紙を開けて読んでしまおうか、それともレミリアの言うとおりを待とうか。

はあ、と吐くため息は、そうこうしている間にも時は過ぎ、消極的に後者を選択しつつあることへの自覚だ。

おそらく、レミリアの言うその時は、そう遠くない。

「このままでいいのか、いけないのか、それが問題ね」

前にも言った気がする台詞だな、と思いながら外に目を見やる。

障子の開け放った部屋には南向きの縁側から日光が差し込み、少し眩しい。

日差しの向く方に手紙を持った手を翳して、ふと、透けて中が見えないだろうかなどと益体のないことを試みた。

「そんなに気になってるんだったら、開けてみればいいじゃないか」

「そーなんだけどねえ。あ、魔理沙、お煎餅取って」

「お、今日は骨せんべいか」

今来たらしい魔理沙が縁側に座って霊夢へ声を掛ける。このやりとりもここ三日間でおなじみだ。

変わるのは煎餅の種類だけである。

ぱり、と霊夢は骨せんべいを齧る。先日のかの骨に塩を振り、水分が完全に飛ぶまで干して揚げたものだ。

なかなか美味しいが、骨せんべいとは言っても煎餅とは別物だと

言わざるを得なかった。

どちらかと言うとお茶よりもお酒が欲しくなる味である。

「で、何をそんなに悩んでるんだ？お前にしちゃ珍しいじゃないか」
「んー、何て言うかね、開けるのも開けないのも面倒がありそうな感じ」

「勘か」

「勘ね」

なるほどそれは悩むだろうな、と魔理沙が真剣に頷く。

なにせ自他ともに認める巫女の勘である。

異変があれば動くべき瞬間を嗅ぎつけ、円満に終わる最高のタイミングで首謀者を探知し、弾幕の避け方すら思いつく。

魔理沙が薄々それは神託なんじゃなろうかと思っている、博麗霊夢の超人的な勘。

それが開けろとも開けるなとも言わない、のではない。開けろと言いい、開けるなと言っているのである。

「それなら」

「ん？」

「私がひとつ走り飛んで、紅魔館の様子、見てやろうか？」

「あー……」

なるほどそれもありかな、という顔を一瞬した霊夢だったが、また顔を曇らせた。

あー、とも、んー、とも言えない声を漏らして暫し眉を寄せ、やつぱいいわ、と結論を出す。

自分がこの手紙を今開けるのと、結局変わらない気がしたのだ。それもやはり勘だが。

「なあ霊夢、そもそも、どっちにしろ面倒があるなら一緒じゃないのか？」

気になるんなら開けちゃえばいいじゃないか」

「面倒になるのは一緒でも、結果が違うんでしょ。何となくだけど」

「で、お前はどっちを選ぶのかためらってるよ」
「そんなじゃないわよ。そもそも、どうなるか分かんないのに選
びようもないわよ」

結果。

結果か、と霊夢は口の中で反芻する。結果のことを考える。結果のことを考えることを、考える。

あの不良吸血鬼は何を考えているのだろうか。何と考えているのだろうか。

そこに答えがある気がした。

答え。

何の答え？

「そっか」

「ん？ どうした、霊夢」

「ねえ魔理沙。この手紙……何が書かれてるのかしらね」

「開ける気に——なったわけじゃないみたいだな」

つまり、開けずに考えてみようということか。

そう問う魔理沙に向かって、霊夢はごろりと半回転。

俯せになって、それから肘を立てて上半身を起こした。

「普通に考えたら、異変になったときのためのルール確認じゃないか？」

「普通に考えれば、ね。でもそれならいつ開けたって同じじゃない？」

命名決闘法——スペルカードルールは大枠が明文化されているものの、行うものによって内容が異なる場合がある。

肉弾戦の可否、スペルカードの枚数、喰らいボムの有無及びラストスペル化、などがその代表である。

大概はその場の勢いで決まるが、それは突発的な試合が多いからだ。なにせ、気軽に行える弾幕ごっこである。

「じゃあ……その内容が弾幕ごっこじゃないとか」

「さすがにそれはないでしょ、レミリアに限って」

これがレミリアでなければ、あり得ると言えばあり得る。

最近是谁も彼も弾幕ごっこばかりやっているので忘れがちだが、人妖の決闘方法は弾幕ごっこに限られていない。

どころか、「弾幕ごっこは少女の遊び」というだけあって、男性の妖怪等は弾幕ごっこなどやったことが無いモノが多かったりする。

だが、レミリアは少女で、吸血鬼である。

弱点や制約の多い吸血鬼は、ルールが守られなければ始まらない類の妖怪だ。それ故にルールの中での戦いには滅法強い。

ましてレミリアという個体は流行に乗るのが好きな少女である。

比較的ルールがきちんと決まっについて、なおかつ少女の間で大流行中である弾幕ごっこ以外を選ぶとは考え難い。

「だったら、異変になったときの宣戦布告文ってわけじゃあないんだろ」

「あんたも、そう思う？」

だとしたら、何が書いてあるのか。

霊夢は考える。——それが答えだと、霊夢の勘は言っていた。

何の答え？　すべての答え。

私はそもそも、何をしに紅魔館へ行ったのだったか。
忘れ傘、そして。

『これは……レミリア？』

霊夢はおもむろに起き上がり、はたと考え込んだ。

何かが。何かが掴めそうだった。

何が掴めるだろうか、と思った。掴めるだろう何かを、思った。

『ああ……お嬢様と妹様が、ちょっと。拳で語り合うという奴ですかねー』

これは、異変だ。

誰の？　レミリアの。

違う、誰と、誰の？

『フランがね……外になんて出たくない、って言うのよ。私とパチエと、咲夜と美鈴が居れば、それでいいんだって』

レミリアとフランの、これは異変だ。

どうして。

どうして、レミリアは。どうして、フランは。

『……ああ、そういう。そうね、私にもあったわ。修行が嫌で嫌で、拗ねて「ご飯なんていらない！」って言って先代巫女^{おばあちゃん}困らせたことが』

どうして、私は。

あの頃、何で修行なんてしたくないってごねたんだった？

「……っ！」

「……霊夢？」

息を呑む。

そうだ。私は知ってたんだ。

「ごめん、魔理沙。ちょっと行ってくる」

「私——は、ついていけない方がよさそうだな。ほら、これ」
「ありがと」

魔理沙が差し出したのは、お祓い棒と針入れ、お札の束。
それから、一杯の、お茶。

「……いつの間に」

「お前が考え込み始めたときに。台所借りるぜ、って言ったんだけど、やっぱり気づいてなかったか。

熱いぜ、ミニ八卦炉で瞬間湯沸したからな」

「今はそれくらいがちょうどいいわ」

そう言うと思った、と頷いた魔理沙に、霊夢は薄く笑った。

湯気の立つお茶を、気付け代わりにぐいっと一飲み。

ぷはっ、と息を吐いて、湯のみを魔理沙の胸元に押し付ける。

行ってこい、という魔理沙に頷いて、霊夢は縁側から空へと舞い上がった。

『……ああ、そういう。そうね、私にもあったわ。修行が嫌で嫌で、拗ねて「ご飯なんていらない！」って言って先代巫女おばあちゃん困らせたことが』

霊夢は思い出す。

そう、あの頃私は知っていたのだ。

それが博麗の巫女になるための修行だということを。

修行が終わったら、先代巫女おばあちゃんにはもうこの世に何の未練も無くな
ってしまふことを。

人は死ぬ。それでも、それが分かっている、私は分かりたくな
んてなかったのだ。

手に握りしめた手紙の封を切る。選択の時はもう終わったことを
半ば感じながら。

開いた手紙を、読むなんてことはしない。ざっと見て、予想通り
の単語があることだけを確認した。

フランとレミリアの立場は、私と先代巫女おばあちゃんとは違う。

けれど多分、フランと私は似たようなものだろう。

違うのは、失うか、失ったか。或いは、奪ったか。

私は先代巫女おばあちゃんに教えられた。その生と、拒みようない死を以て
教えられた。

失うことを。この世の理が喪失と創造の無限螺旋であることを。

生とは、既にして死を内包することを。

死は哀しいけれど、それは自然なもの一つの形なのだと、私は
理解せざるを得なかった。

なにもものにも縛られず、ただ「在るが儘」に在ること。

それが「空を飛ぶ」ということの意味だから。

私の能力であり、私の本質だから。

だからフランはレミリアに教えられようとしている。今まで分か
りたくない拒んできたことを。

奪うことを。この世の理を。

死は、生に内包されるものであることを。

だって、彼女は。

あらゆるモノを壊してきた。

第五話 忘れられた神の神子と過去からの手紙（後書き）

フランちゃんの情操教育としては割とありがち、生への認識というワードが登場。

でも、それだけでは終わらない：話にする、予定です。

何せそれだけで回せる先達の方々ほど素の筆力がありません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4077m/>

東方遺志継 ～あるいは、たったひとつの冴えたやり方～

2011年10月10日09時49分発行